

温故知新 - 第2回 -

財 団 助 成 研 究

... その 後

第3回短期海外派遣助成採択者
 第4回国際共同研究助成採択者
 第14回国際共同研究助成採択者



京都大学大学院医学研究科医療経済学分野 教授 今中 雄一

ファイザーヘルスリサーチ振興財団から小生はまず平成6年に助成をいただいている。

『(平成6年度日本人研究者派遣)米国の医療機関認定合同委員会のサーベイヤ育成の公式研究と実地訓練で修得した技術と情報を活用し、医療機関評価・質向上の我が国独自の展開と開発研修を行うため』これは、ちょうど、財団法人日本医療機能評価機構設立の準備時期だった。これを機に3-4週間に及ぶ公式研修を修了し米国5病院のサーベイ実地研修を行うことができた。もちろん、わが国の病院機能評価・認定制度は、研修も含めて、わが国の独自色の大変強いものである。とはいうものの、研修プログラム設計、評価手法設計や研修などを手伝わさせていただき、少くくは貢献できたのではないかと身勝手に思っているところもある。上記助成からは話がずれてしまうが、そもそも、「医療の質の研究会(質研)」にて、岩崎榮先生、郡司篤晃先生、河北博文先生にご指導を受けて研究・実践活動に加わせていただいていた経緯があったため、若造で研修会講師やサーベイヤ見本など担当して冷や汗ものであった。ベテランの院長先生方に厳しく優しくご指導を賜り後々の糧になっていった。

『(平成7年度国際共同研究)病院医療の質向上活動が及ぼす臨床的・経済的効果：我が国のモデル病院におけるTotal Quality Managementデモンストレーション・プロジェクト実施とその影響の定量的評価』この研究助成も一つの契機となり、北海道から沖縄までの70数病院がご参加くださり、患者満足度と病院職員の職務満足度、職員の質改善活動を測定し、多施設ベンチマーキングを試みる事ができた。コアとなる指標の規定要因や構造を分析し、国際学会で高く評価され賞を受けた。現在は、患者・職務満足に加えて、組織文化の調査へと発展し、安全確保や経営向上に役立つツールに向けての研究を進めている。

やや話がそれるが、ちょうどこの年から、日本版DRGを見越して先進的な病院の先生方のご協力、ご指導の下に、入院患者の診療情報とレセプト情報を集め、診療プロセスや医療資源消費の比較・分析・フィードバックを行うQuality Indicator Project(現Quality Indicator and Improvement Project: QIP)を開始することができた。これは、日本版DRG/PPSの試行の立ち上げに寄与し、さらに、それはDPCの事業へと発展した。医事データのE、Fファイルの元祖でもある。DPCの研究事業の中ではパフォーマンス指標や原価(<http://med-econ.umin.ac.jp/costing/>)などを担当させていただき、今に至っている。一方、QIP(<http://med-econ.umin.ac.jp/QIP/>)は新しい病院も加わって存続しており、教室員やシステムのパワーアップのもとに、診療活動の細かい分析ができるようになり、フィードバックする指標も少しずつ進歩している。

上記の研究活動群を土台に、この2-3年は、中医協の下の組織と連携しながら、医療の質・安全に必要なコストを把握する研究(http://med-econ.umin.ac.jp/safety_cost/)を行い、また、医療経営人材育成(<http://med-econ.umin.ac.jp/keiei/>)の領域に注力している。

今年度、貴財団助成の医学医療教育シミュレータの研究に、医療の質確保、関連産業分析の視点から、大研究チームの一員として参加させていただいている。これは有意義に進んでおり、大いに勉強させていただいている。

今後の貴財団の益々のご発展を祈ってやまない。